

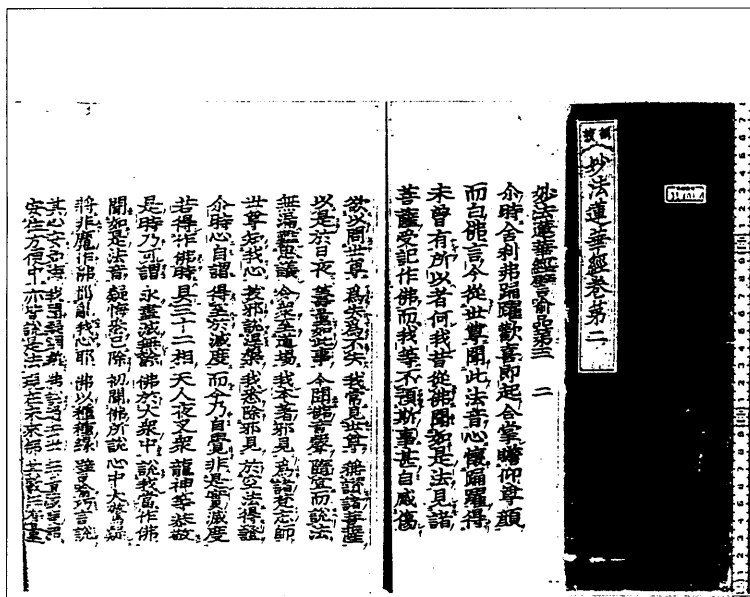
# 法華經訓読史研究の諸問題

田 島 毓 堂

## 一 はじめに——法華經為字和訓考

昭和五十三年度、『名古屋大学文学部三十周年記念論集』に「法華經為字訓序説——付、為字索引——」と題して、法華經の為字の和訓をテーマとして取り上げて以来、『法華經為為章』の為字訓別にその為字の和訓を考察し、「法華經為字和訓考」(一) (八)を連載し、ついで、この資料篇(二) (八)を掲載し、平成六年度をもつて、法華經為字和訓考は不完全ながら完結した。長期に渡つたので、その間に初期には知らずにゐた多くの資料に遭遇したが、途中で使用する資料を追加したり、変更したりするやうなことはしなかつた。ただ、新出資料が有益な示唆を与へてくれることは多かつたが、根本的に論自体の変更を迫られるやうなことは幸ひに起こらなかつた。

ただ、長期間を経過する内に、数多くの興味深い資料に出会つたことは確かであり、初期には問題にしてゐなかつたことで、重要な問題として浮上して来ることも多かつた。それらは和訓考の中では、



単に問題の指摘にとどめ、すべて、一旦完結してから改めて論ずることとしたため、いくつかの問題を積み残したままで終ったことになる。もちろん、この間、個々の問題については、いくつかのモノグラフに記した。

以下、若干の問題について、特に順序だてることもなく、法華經訓読史研究上の所要のことを記しておきたい。

## 二 法華經為為章と為字訓・為字和訓

ある意味で法華經為字和訓考を促した為字の特殊な和訓、この源泉になつてゐた『法華經為為章』については、そのテキスト研究及び平安時代の法華經古点本との関係を記した「法華經為為章考」<sup>(注3)</sup>を書いた。「法華經訓読と為為章——為字訓について——」<sup>(注4)</sup>には為字訓と為字和訓との関係についてその要点を簡略に記した。その後も為為章の新しい資料は出現してゐないが、必ずや、由緒ある古寺の篋底に潜んでゐるものと思ふ。

為字訓及び為字和訓に関していへば、「和訓考」を書き始めた当初は、平安古点本に、為字訓による為字和訓が見られたほかは、近世初期の『文段經妙法蓮華經』<sup>(注6)</sup>の訓点まで、為字訓の影響を見ることがなかった。それどころか、中世には心空の『倭点法華經』<sup>(注7)</sup>以外には、ほとんど法華經の訓点本すら知られてゐなかつたが、小林芳規・松本光隆両氏により紹介された防府天満宮藏の法華經には為字訓が一部見られた。さらに、日光輪王寺天海藏の高麗版法華經の訓

点には全巻にわたり為字訓による為字和訓が見られ、所々に為字訓そのものも記されてゐる。為字訓をもつ資料の探索は今後も更に続けられねばならないが、佼成図書館藏の江戸時代の訓点付の版本(折本)法華經には、為字訓による為字和訓をもつものがあつた。<sup>(口絵写真注8)</sup>私の見えたものは、残念ながら全巻揃つたものではなかつたが、版本ゆゑ、いづれ僚巻も出現すると思ふ。ただ、これを採すには、刊記等一切ないので、一々法華經の版本を尋ねる外ない。為字訓による為字和訓をもつ版本は、文段經以外では、頂妙寺版がそれに当たる。上記版本は頂妙寺版以前のものと思はれる。

仮名書き法華經は、足利本仮名書き法華經に始まり、現在までにかなりの数のものが知られるやうになつた。仮名書き本は訓点本とは違つた様相をもつものであり、足利本等には為字訓による為字和訓は見られないが、仮名書き本の中にも為字訓を生かした為字和訓をもつものがあつた。佼成図書館藏仮名書き法華經八冊本(写本)である。それについて、「訓読法華經と仮名書き法華經と——法華經和訳の経緯を概観し、語彙史の方法を提案し、仮名書き本としての佼成本仮名書き法華經を為字訓よりみる——」<sup>(注9)</sup>に概略を記した。この本は序品と方便品に、その為字を為字訓によつて読んだと思はれるものがあつた。恐らく、為字訓をもつた本文から訓読されたものであらう。

為字訓そのものの所在についていへば、為為章(写本・和刻本・活版本)、「補注」(法華三大部補注)(宋版・和刻本・活版本)を源

泉として、立本寺藏妙法蓮華經古点・龍光院藏妙法蓮華經古点・防府天満宮藏妙法蓮華經・日光山天海藏高麗版妙法蓮華經・文段經妙法蓮華經・日相本妙法蓮華經・科注妙法蓮華經(徐注)及び浄嚴の『冠註略解妙法華經新註』にも極く一部にある。なほ、科注の唐本や活版本には為字訓は見られず、和刻本に為字訓が付されるやうになる。五山版の科注妙法蓮華經(徐注)にすでに為字訓が刻まれている。法華經本文ではないが、日遠「法華訳和尋跡抄」や宗淵上人(二七八六―一八五九)「法華經山家本裏書」等にもある。

この内、科注と日相本の為字訓は、現在見る為為章・補注のそれとは相当隔たりがある。何によつたかが注目されるところであるが、天海藏高麗版法華經に見られる為字訓には、これらと一脈通じるものがある。そして、科注には前記のやうにすでに五山版に、江戸時代の和刻本同様の為字訓が注されてゐるのである。また、科注の為字訓と日相本のそれともかなりの差があるのである。

いづれにしろ、これらの為字訓の来源を突き止めることが必要である。文段經・法華訳和尋跡抄には為為章の名は出てこない。日遠は補注に依つてゐるが、科注や日相本はそのいづれによつたか、あるいは、第三の典拠があつたのか、興味有るところである。

### 三 為字訓の意義―漢字訓の役割―

為字訓が漢字で存在してゐることの意義は頂妙寺版の改訓の様子をみると端的に理解される。すなはち、頂妙寺版法華經は、初版以

来、何回も版を改め、頂妙寺版以外にも、妙満寺版として同一内容で出版されてゐる。頂妙寺版法華經の訓点に関しては、明治版における水野日顕師による改訓と、昭和新版の布施浩岳師による改訓といふ二回の改訓を経てゐる。初版Ⅱ天保五年版の訓点は恐らくは文段經を依りどころにしてゐると思はれる。文段經には仮名による和訓と共に、為字訓が漢字訓として残つてゐる。為字和訓はそれによつて与へられてゐるものが多い。しかし、それらは為字訓があつてはじめて首肯されるやうな和訓を含んでゐる。一旦、漢字訓としての為字訓が削られ、和訓だけになつてしまふと、その為字になぜそのやうな和訓(例へば、ムカフとかベシのやうな)が有るのか解らなくなり、その結果、写し誤られたり、改訓の対象になつたりする。明治版における水野日顕師による改訓がまさにそれであり、水野師によつて「往々有不適時宜者」として改訓の対象になつたものには、漢字訓を失つた為字の和訓が多数含まれてゐる(「為メテ是レ究竟ノ法ナリヤ 為メテ是レ所行ノ道ナリヤ」を「為ニ是レ究竟ノ法ニ」為ニ是レ所行ノ道ニ」と改訓し「不ラン勤テ為ハ法ニ」を「不ラン勤テ為メニセ法ノ」と改訓してゐる)。もちろん、水野師の改訓の動機はこれだけではないが、これが大きなファクターになつてゐる。もと漢字訓があつたことすら気づかれてはゐないのではなからうか。ある漢字に付けられた漢字の注は、その漢字の常用和訓でないものを、その和訓として存在させるだけの威力があり、逆にその支へを失ふと途端に、その漢字がなぜさう読まれるのかさへ不明になる。といふことはそ

の威力を反面から示してゐるのである。漢字訓自体は常用漢字的な文字であり、それが想起させる和訓は漢字訓として用いられた漢字の常用和訓的な和訓である。古辞書等において、漢字による義注が施されることは普通の事であるが、直接間接を問はず、その漢字による注が、漢字訓としての機能を果たし、それを経て後の段階で和訓化されてゐることは、新撰字鏡・類聚名義抄・字鏡・字鏡集その他を見てゐると始終有ることである。どの段階で和訓化が起こつてゐるかは、他に介在してゐるものも当然考へられる現在では簡単にはいへぬが、漢字注が漢字の和訓発生に対して果たした役割は十分に重視されてよい。それには、日本語による文字活動の中で常用され、従つて、その和訓も常用化してゐた漢字をきちんと見極めねばならない。

#### 四 頂妙寺版の改訓

頂妙寺版における改訓は、その影響を考へると、訓読史の上で重大な問題である。これは近代のことであり、上記のやうな事情があつたものである。頂妙寺版の成立、および、その改訓の事情については其の一部について述べたことがあるが、<sup>(注17・18)</sup>ここで若干所要のことを述べておきたい。

古代における法華經の訓読はさておき、近世・近代の、特に近代の法華經訓読史における頂妙寺版の果たした影響は計り知れないほど大きい。中にはこれと全く没交渉のものもあるにはあるが、多く

の訓読が何らかの影響を受けてゐる。

前述のごとく、頂妙寺版の訓点の改訓は二回にわたり、大規模に行はれた。第一回は頂妙寺四十五世妙修院日顕、水野氏によつてなされた。その跋文によれば、上妙院日瞻が初版に、諸本を校合して訓点を施したことを述べ、其の版が摩滅し、文久元年に刻成した版も又摩滅した、それを遺憾に思つてゐたところ、肥前の日苗師がきて、三度これを刻さんといふ、然るに、「此本訓点往々有不適時宜者」のゆえに、さらに校合し、日修上人の閱を請うて、割麤に付したといふ。明治十八年のことである。

この改訓は相当大規模なものであつた。為字の和訓についてだけでも相当な改訓がなされてゐることは、すでに述べた通りである。全体の改訓の様子についてもきちんと調べておかねばならない。

第二回は、新頂妙寺版における改訓である。この度はその跋文に「明治十八年刊行の頂妙寺版法華經は、水野日顕師の跋文にもありますように、多大の労苦が費やされて遺された業績であります、梵本を勘校しますと、尚そこに幾多訓点の誤りが見受けられます。従つてこの仮に放置しますと、色読を強調された宗祖に累の及ぶ恐れがありますので、これらの誤訓を最少限度に訂正し、以つて先師の遺績をより輝しく保存すると共に先師鴻恩の万一に報いたく存じまして、敢えてこの出版に踏み切りました。この新本により正しい訓読の次第に流布するよう祈るものです。」とある。頂妙寺五十八世布施浩岳師の文である。昭和四十一年の日付があるが、現在昭和

四十七年の改版が通用してゐる。

どこがどう直されてゐるのかこれでは全くわからない。梵本を勘校するといふことも具体的には何を指すか分からない。分からない状態とてやかくはいへぬが、梵文から中国語に翻訳された時に誤訳が無いとはいへぬし、それを訓読するのであるから、訓読を少し直した程度で何ともならぬのではないか。そもそも誤りとは何かといふことはつきりさせた上でなされるべきことのやうに思はれる。いづれ、この実態は明らかにしたいと思つてゐる。

## 五 慈海版・山家読み

総じて、天台系では、訓読にはさほど熱心ではなかつたやうに見受けられる。<sup>(注19)</sup> 山家読みの口伝をテキスト化した慈海版は今でも一つの標準たる地位を失はない。西来寺宗淵は慈覚大師相伝といはれる山家読みそのものを復活すべく、法華経諸本を渉獵し、山家本法華経を開版した(天保六年<sup>(一八三五)</sup>)。そして、仮名によつて読みを示し、独特の読みなどについては、裏書を著してゐる。この『法華経山家本裏書』は『法華経考異』共々貴重な資料を提供してゐる。これによれば、宗淵上人自身は訓読にも深い関心をもつてゐたことが知られる。さらに、最近萩原義雄氏らによつて公刊された宗淵手沢の仮名書き法華経によつて宗淵の関心の有りどころがよく解るのである。<sup>(注22)</sup> しかし、その後の人々はやはり余り訓読には熱意を示さなかつた。明治二十四年に出された前延暦寺大僧正赤松光映関『訓点校正妙法

蓮華経』の訓点には、訓読史に対する顧慮は皆無である。まことに杜撰なものとはいへない。大正三年、島地大等師が天台学者を代表するやうなかたちで『漢和对照妙法蓮華経』を公刊しよく流布した。法華経普及会の法華経訓訳はこれに危機感を抱いての事であつたといふ(真訓両読本の「校正を終りて」に、次のごとくいふ。「果せる哉、該書の流布は宗徒の法華経読誦を乱し、吾人をして本経の読誦本は宗門人の手によりて、成されざるべからざるを切に念願はしむに至りぬ」と)。その「刻経縁起」にいふには、その訓読書き下しの文は「古来慈覚大師の点訓」と伝ふるものに基づいてゐるといふ。しかし、これはうかつに信じるわけには行かない。頂妙寺版の明治版の訓点とは確かに異なるところがある。しかし、慈覚大師といへば、八世紀から九世紀を生きた人である(七九四―八六四)。その「点訓」があれば、法華経訓読史上でも特筆して大書すべきものであらう。平安初期の訓点を伝へるのは僅かに山田嘉造氏旧蔵(日本大学現蔵)法華経方便品があるのみ、これこそ丁度慈覚大師前後の訓点であるといはれる。<sup>(注23)</sup> この訓点による釈文が大坪併治氏によるもの、築島裕・小林芳規両氏によるもの及び中田祝夫氏によるものの三種があるが、よほど平安後期以後のものとは異なつた様相をしてゐる。慈覚大師の点訓といふものをどう理解すべきかは問題もあるが、それを通常の訓点のやうに理解するとすれば、それによつて読み下したものが『漢和对照妙法蓮華経』の訓読文に見られるやうなものである筈はなからう。この訓読が何によつてなされた

かは、まだ十分に精査してないが、頂妙寺版初版ないし文段経あたりを、もとにしてゐると思はれる。天台系の法華経訓読に対する態度の一端をかいまみるやうな気がする。この「慈覚大師の点訓」なるものの実態を明らかにし、かつ、『漢和対照妙法蓮華経』の訓読文についても、その由来をはつきりさせる必要がある。

## 六 倭点法華経・頂妙寺版法華経

もちろん、中世天台には、心空の倭点法華経がある。この意義についてはかつて述べたことがあるので再説しないが、訓読といふ点では多くの影響を与へたものである。叡山文庫所蔵の法華経には詳細な訓点をもつものがある。<sup>(注26)</sup>しかし、日蓮系が、日蓮の文段経をもち、頂妙寺版といふ標準テキストをもつのに比べれば、やはり、訓読に対する態度の差は歴然たるものがある。

頂妙寺版初版は天保五年<sup>(一八三四)</sup>に出た。しかし、その版は程なく摩滅したといふ。文久元年<sup>(一八六一)</sup>にはそのままの形で再度復刻された。いつたい、どれほどの部数が刷られたのであらうか。初版本の残存してゐるものは少ない。頂妙寺版初版といはれるものは、多くが文久版である。文久版は、刷りのいいもの、擦り切れたものなど天保版よりは多く残つてゐる。文久版の前に、京都妙満寺日品によつて、この天保版をもとに同様の訓点付の本が出されてゐる。天保版がなくなつたからだといふ。いつのことか明確ではないが、日品は安政五年<sup>(一八五八)</sup>、六十歳で没してゐるので、天保版と文久版との

間の出来事であることが分かる。とにかくよほどの需要があり、よほどの数が出版されたものと見える。この実数がどれほどのものか、機会のあるごとに専門家に尋ねるのであるが、なかなか正確なことが分らないのが残念である。

## 七 科注妙法蓮華経

頂妙寺版に対する旺盛な需要に関して、科注妙法蓮華経の盛行の様子について触れておきたい。妙法蓮華経科注には、主なものに三種有る。倫注と徐注と如注とである。宋柯山金谿棲雲沙門釈守倫が注し、法済が参訂したものを、明の閔夢得が較刻した(崇禎元年<sup>(一六二八)</sup>)版をもととした和刻本がある(延宝八年<sup>(一六八〇)</sup> 平楽寺村上勘兵衛雕刻)。これを倫注といふ。徐注といふのは、中国本土で、この倫注の印本が湮没したのを嘆いて、徐行善が科によつて註を分かち、守倫の落としたものも補つたものである。このことを、これを校証した必昇が述べてゐる(元貞元年<sup>(二二九五)</sup>)。この徐注は、日本にも広く行はれてゐる。前述の五山版の科注はこの徐注である。江戸時代には多くの和刻本がある。私の見た徐注だけでも十本はある。しかも、いづれも十七世紀中のものである。①寛永辛未仲春(八年<sup>(一六三二)</sup>)、豊雪斎道伴刊十冊本が古い。ついで、②慶安二年<sup>(一六四九)</sup>版(豊興堂新刊)、③同四年<sup>(一六五一)</sup>版(中野氏道伴)、④寛文八年<sup>(一六六八)</sup>版(書肆重刊)、⑤同十一年<sup>(一六七二)</sup>版(山田屋喜兵衛)、⑥延宝四年<sup>(一六七六)</sup>版(中村五兵衛開板)、⑦同八年<sup>(一六八〇)</sup>版(村上勘兵衛)、⑧天

和三年<sup>一六八三</sup>版（中野氏板行）、⑨貞享三年<sup>一六八六</sup>版（勵学堂河内屋善兵衛刊）、⑩元禄四年<sup>一六九一</sup>版（中村五兵衛）である。僅か六十年間にこれだけ有る。まだ有るかもしれない。これらは、すべて同一版面を持つ。しかし、版そのものは別である。つまり、他の刷り本をそのまま版下に使った復刻本なのである。それぞれ微妙な差がある。よほどの需要があつたといへるであらう。後にこれを洋本仕立てにしたものも出てゐる（例へば、立正大学出版部で、昭和七年に寛文十一年版が、縮刷複製されてゐる）。

さらに、如注（明一如の注）がある。これは新注ともいはれる。この和刻本もある（寛文七年村上平樂寺開板）。この新注にさらに注を加へたものがある。浄嚴の『冠注略解妙法華經新註』（元禄三年村上平樂寺刊行）である。これも、明治十三年慧光寺日貞の志しにより、毘尼薩台嚴が訂補して銅版印刷に付された。出版元には村上勘兵衛がなつてゐる。

なほ、その和訓における為字訓の扱ひをみると、徐注では五山版以来為字訓が付刻されてゐるが、江戸時代の和刻本の付訓にその為字訓は生かされてゐない。所蔵者が為字訓によりその和訓を訂正してゐるものがある。一方、倫注の和刻本には為字訓はないが、為字和訓が為字訓によつてゐる事は一見明かである。また、如注の和刻本の付訓も倫注のそれとほぼ同じである。

この外に、仮名本の科注がある。内容的には同じものであるが、書名も造本も異なる何種類かがある。私の見えたものはその内の三

種である。「首書絵入法華經仮名新注抄」（十六冊 山本春正写 同氏景正梓 平樂寺村上勘兵衛）、「科注絵入法華經かな新注抄」（三十冊 識語書肆同じ）「法華經科注抄平かな」（三十冊 寛文十三年癸丑春三月山本春正写 西洞院通田中町 同氏景正梓）内容的には皆同じであるが、このやうに書名をかへ、書冊形式までかへてゐるのである。

いづれにしろ、かやうに多彩な科注が出版されてゐる。決して「藏經愈多読之者愈少」（明治版新注の身延山日鑑の序の文句）ではあるまい。やはりそれだけの需要があつたとみる。現に、属目しえた本はいづれも多数の書き入れをもつものが多かつたのである。

この科注の盛行自体は、ことばの問題ではないが、文化史的には、頂妙寺版の版の摩滅と趣を同じくする現象ではなからうか。なほ、写本としての科注も当然ながら存する。

訓読史の問題として考へれば、五山版科注の訓点は印刷されたものではなく、所持者の書き入れである。全巻にわたり限なく加點されてゐる。その付訓の時期を推定するためにもこの精査が必要である。中世のものであるとすれば、依然として数少ない中世の法華經の訓点として貴重である。江戸時代の和刻本における訓点は、そこに書き加へられてゐる所持者の付訓と共に、法華經訓読を考察する際の重要な資料である。徐注と倫注・如注の和刻本では訓読に差があり、浄嚴の新注も別の訓点が独立して付けられてゐる。いづれも、量的にも全巻揃ふものであり、貴重なものである。科註それぞれに

おける為字訓の有無とその為字の訓読の仕方に付いては既に述べた。

## 八 両点本法華経

頂妙寺版のやうな訓点付きの本が、実際にどのやうに使はれたかといへば、もちろん、その訓点によつて訓読して法華経を理解するといふ用途があつたであらうが、一方では日常読誦用の経本としての役割も大きかつたと思ふ。そのためには、実は訓点はむしろ邪魔でさへあり、一方、読誦音は不明なこともある。真読<sup>二</sup>音読のためには、日相本のやうな総仮名付本もあつた。しかし、これは音読が示されるのみ、意味を取るのは困難である。その両方の要求を満たすものとして、一方の側に音読の仮名を付け、他方に訓点及び送り仮名、振り仮名を付けたものがあつた。これを両点本といふ。私が今までに見たものでいへば、すべて、右側に平仮名で音読の仮名が付けられ、左側に片仮名で、振り仮名・送り仮名及び返り点などが付いてゐる。日常の音読用の経本であり、同時にその訓点を辿れば法華経の訓読ができ、その意味理解に役立つたのである。それは、その書冊形式からいへるやうに思ふ。すなはち、二冊本もあるが、多くは八冊本であり、いずれも折本である。卷子本より便利なことはいふまでもなく、冊子本よりも、日用本としてはこの方が便利なのである。

また、その訓点の様子から、両点本は恐らく、頂妙寺版とは直接の関係なく、多くのものが出版されてゐる。もつとも、頂妙寺版は、

十九世紀の前半の出版ゆへ、それ以前の需要を満たすことはできなかったのである。この両点本と称される法華経版本は、これまであまり取り上げてこなかつたが、かなりの種類がある。法華経為字和訓考の中では、「平樂寺版妙法蓮華経 改正新版両点句読」といふ本を用ゐてゐるが、この本を用ゐたのは、これが万延二年一八六一改刻とあり、その出版年が分かるものであるからである。逆にいへば、多くの両点本があるにはあるが、その確実な出版時が分からないといふ事情がある。この訓点及び読誦音について、きちんと調べることが必要であらう。上記の本の一部に付いていへば、その訓点は、何か一つのものによつたのではなく、巻によつて、依拠するものに違いがあるやうであつた。<sup>(注28)</sup>このことは、これらの両点本にその作成者が記されることのないことも関係あることであらう。つまり、これは誰かが責任をもつてつくるといふ、学的性格をもつ類のものではなく、日常の実用に供することを第一としたものであつたであらうといふことである。それに、学問的嚴密性を求めることは無意味であらう。大体の用が足せばよいのである。日常用といふことの中には、学習用といふ用途も含まれるであらう。刊記もなく、編者も示されず、出版人さへ書かれてゐないのはこんな風に考へられないだらうか。

それはともあれ、さういふものであればあつたで、その読誦音にしても、訓点にしても、それを明らかにしておくことは、大衆文化としての、法華経訓読や音読を明らかにするといふことであり、大



切なことであると思ふ。法華經普及に果たした役割は大きいものである。

これらの研究は、まづ資料の整理分類から始めなければならない。日用的性格からか、なかなか全巻揃はず、欠本のある場合が多いが、消耗品的性格をもつものであつてみれば致し方ないであらう。私の手元にあるもの、寓目したものを掲げておかう。

- ①大乗妙典 改正新版両点附 (二冊中型本 架蔵)
  - ②妙法蓮華經 (八冊大型本 名古屋大学蔵)
  - ③妙法蓮華經 (八冊大型本) (巻一欠 架蔵)
  - ④佼成図書館蔵妙法蓮華經 (大型八冊本 資産図書31 459)
  - ⑤佼成図書館蔵新版両点妙法蓮華經 (大型八冊本 資産図書31 16)
  - ⑥妙法蓮華經 改正新版両点句読 (中型八冊 平楽寺版 万延二年 一八六一改刻 名古屋大学蔵)
  - ⑦佼成図書館蔵妙法蓮華經 (大型八冊本 資産図書31 303 但し巻二・三・五の三冊のみあり)
- まだ、両点本については、十分の調査をしてゐない。今後、資料の収集から始めて行きたい。

## 九 仮名書き本法華經

仮名書き法華經もとを正せば、漢訳法華經を訓読したものである。すでに、奈良時代にも訓読されてをり、儀式において法華經が

法華經訓読史研究の諸問題(田島)

訓読によつて読誦されてゐたことが知られてゐる。しかし、それを示す遺品は遺憾ながらかけらも無い。平安時代の物すら、仮名書き法華經としては無い。鎌倉時代に入るといろいろのものがある。その極く初期のものがすでに版經であつたといふのが象徴的である。

仮名書き法華經(単にかういへば、音読・訓読両方あるが、さしあたり問題にするのは訓読の仮名書きである)の用途の第一は衆人斉唱用といふことであらう。衆人でなくてもよい。一人で訓読文を読誦することを考へてもよいが、衆人斉唱となれば同じ本がいくつも要るといふことになる。版經ならまことに都合がよいのである。婦女子のためのものといふ考へもあるが、婦女子の何のためかと、もう一度問ひ直せば、やはり読誦用といふことで、衆人斉唱といふことも、仮名書き本の用途の説明として同じことをさすことにならう。そして、日用に供せられたため、消耗品の常として、殆ど遺品が無いのだと考へられる。残つてゐるのは偶然であらう。法華訳和尋跡抄に仮名書き本として法印本・定家本が上げられてゐる。共に印本だといつてゐる。現在、これと近いものは知られてゐるが、法印本・定家本そのものは知られてゐない。それも、上記の理由で説明されるのではなからうか。ただ、足利本や瑞光寺本のやうな卷子本は、折本・冊子本に比べれば日用としての使ひ方はされなかつたのではなからうか。現存するものには各種の形態がある。以下に既紹介・未紹介あはせてその遺品を掲げておかう。

- ①唐招提寺藏断簡二葉(巻三薬草喻品) 鎌倉初期か

② 故矢代仁兵衛氏蔵卷三・一帖（未見・兜木正亨『法華版経の研究』に一部翻刻あり、中田祝夫氏も所在不明といふ）鎌倉初期を下らぬといふ。

③ 法印本（上述・逸文のみ） ③ 定家仮名本（上述・逸文のみ）

④ 法華絵巻の本文（如来神力品と囑累品の一部）鎌倉時代（『続日本絵巻大成10』所収、昭和五十九）

⑤ 妙一記念館本仮名書き法華経（中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経』影印篇上下（昭和六十三）、翻刻篇（平成一）、索引篇（平成二）、研究篇（平成五）、卷三の末尾三葉は欠落を後補）

⑥ 瑞光寺本仮名書き法華経（中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経』研究篇に、その影印と釈文がある）

⑦ 天理図書館本仮名書き法華経卷三（『山辺道』26号に広浜文雄氏の釈文と解題がある。また、中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経』研究篇にも、広浜氏による釈文、略解説と写真二葉がある。同氏による自立語索引が『訓点語と訓点資料』68 昭和五十七 にある）

⑧ 足利本仮名書き法華経（中田祝夫『足利本仮名書き法華経』影印篇（昭和四十九）、翻字篇（昭和五十一）、索引篇（昭和五十二）、卷六の分別功德品、卷七の如来神力品・囑累品の三品は切り出されてしまつてをり現存しない。この部分は、翻字は摩尼園蔵版本で補つてある。）

⑨ 月が瀬本仮名書き法華経（中田祝夫氏蔵八冊、平成三年五月二十

四日訓点語学会で野沢勝夫氏紹介）

⑩ 守屋本仮名書き法華経（陀羅尼品・勸発品、元来折本であつたものを巻子本に改装、陀羅尼品は末尾欠。京都国立博物館蔵守屋孝蔵氏蒐集本。柏谷直樹氏「守屋本仮名書き法華経について」『訓点語と訓点資料』92 平成五 に釈文がある）

⑪ 和訓法華経（正保四年一六四七刊八冊、この後刷り本もある）

⑫ 摩尼園蔵版妙法蓮華経（文政八年刊折本八帖 中田祝夫氏蔵、天理図書館にこれを写した冊子本八冊あり。佼成図書館には刊記はないが、折本八冊あり。）

⑬ 西来寺蔵仮名書き法華経（写本、木村晟・近藤良一・萩原義雄共編『西来寺蔵仮名書き法華経—影印編—』（平成五） 萩原義雄編『西来寺蔵仮名書き法華経—翻字編—』（平成六）、三井宗堪寄進、宗淵手沢本、書き入れあり）

⑭ 佼成図書館蔵写本仮名書き法華経（八冊、拙稿「訓読法華経と仮名書き法華経と——法華経和訳の経緯を概観し、語彙史の方法を提案し、仮名書き本としての佼成本仮名書き法華経を為字訓よりみる——」高度化推進特別経費・大学院重点特別経費による研究科共同研究「開発における文化 2」（開発・文化叢書5 一九九四所収）に紹介）

⑮ 佼成図書館蔵写本和訓法華経（写本、七冊）

⑯ 佼成図書館蔵写本仮名書き法華経（写本、一冊、零本。「やくさうゆほんだいい」から「じゅうぢゅうつほんだいい十五」まで、



ゐた。宗徒も漸くそれになびきそめたが、その時その善本の無いのを遺憾とした。丁度宗祖の六百の遠忌の一年前だ。私は一本を刻して少しでも報いようとし、親族岩崎氏に謀ったところ、喜んで賛成し、大金を出してくれた。私は、多くの本を参校しよきを取つて印刷に付した。善本とはいひがたいが、これによつて、訓読が世に行はれるならば、興学の一端を開くことができよう。すなはち、時に応じた報恩とするのみならず、先師の遺志を継ぐことにもならうか。」(原漢文、取意)といふ。訓点の由来はこれに明かであるが、実際の作業過程等は不明であり、この訓点の内容も今後検討の要がある(「今也世右文学」とは学問研究を重視することをいふのであらう)。

先の森江佐七の刊本は書名も全く同じ、内容的にも近いものがある。この両者の関係も十分調査しなければならない。当然、頂妙寺版の改訓とも関はつて来るであらう。

② 訓読本としては深川觀察師の『訓訳法華經』(明治三十九 B 6判)がある。ほぼ頂妙寺版の明治改訓版の読み下し文に相当すると思はれるが、かういふものが以前にはなかったためであらうか、大変な意気込みが感じられる。あたかも、法華經原漢文から訓読書き下したかに受け取られる。頂妙寺版の事は一言半句も出てこない。当り前の事なのであらうか。まことに不思議である。しかも、頂妙寺版明治版の忠実なる書き下しなのである。明治四十年には、三十九年版が二分されて和本仕立てで、四十五年には同じく大阪吉田善

造書店から、前の大冊に比べ、小型の菊半截の本が出てゐる(『縮刷訓訳法華經附開結 完』 大正四年にも同書店から出てゐる)。

山川智応師の『和訳法華經』(明治四十五)には、田中智学・姉崎正治両氏の序文があり、そのなかで、「山川智応君の和訳は、嚴に羅什訳によりて」とか「和訳法華經の成りしは、明治の文化に於いて記念すべき一時期を為せるものといふべし」などとその意義を宣揚してゐる。訳者自身の記すところによれば、「作家岡本靈華の助筆」のあつたことが、従来の訓読の旧觀を一変して、流暢にして温雅な全く「日本語的」法華經のなつた所以であるとする。それはともかくとして、ここにも頂妙寺版のことは少しも述べられてゐない。その実は、その影響は端々に見えるのである。本書は、忠実な訓読を目指しつつ、しかも達意の文章になつてゐることは法華經訓読史上、十分留意しておく必要のあることと思ふ。本書は後に新潮文庫の一冊として出版されてゐる(昭和十二年)。

③ 法華經普及会が大正二年三月を期して、本多日生・野口日主・井村日威の発願によつて設立された。法華經は天地法界の秘藏であり、群籍の帝王であり、アジアの中樞であり、仏教觀の実帰で、思想統一の最高指針であるとし、それを携帯に便利で、その価格を安くして一般に普及しようとするものであつた。その年八月には、浅草の統一団から、文庫版(菊半截)の大ききで『縮刷妙法蓮華經並開結』(516頁)が出た。頂妙寺版明治版の活版化である。ただ、その訓点は、活版の不自由のためか、木版や銅版のやうに完全では

ない。しかし、訓点付の本文の出版は、その趣旨の一部を具現するものであつた。定価は二十銭・五十銭・一円の三種があつた。ついで、大正五年には『訓読妙法蓮華經並開結 全』が出版され、以後、続々と増刷されることになる(昭和三十年頃には紙型も使用不能になり、仮名づかひを現代仮名づかひに改めて改版され、現在まで刊行され続けてゐる。立正佼成会の奥付のある本も同じものである。大小の版がある)。このほかに、大正十年には、三星与市が編輯兼発行人となつて『訓読妙法蓮華經並開結 全』が出版されてゐるが、内容は普及会の訓読本そのものであるが、本書のどこにも普及会の名前はない。

次に、普及会では、『真訓両読妙法蓮華經並開結』を大正十三年に公刊してゐる。上段に漢文本文、下段に訓読文を掲げてゐる。これは今でもそのままの形で出版され続けてゐる。丁度島地大等氏の『漢和対照妙法蓮華經』と同じ形である。ただ、この訓読文はまさに頂妙寺版明治版の訓読である。さらに、昭和十八年、大島伸太郎・田中喜久二両氏共著で『漢和対照法華經並開結 全』が出された。上段に訓読文、下段に頂妙寺版の影印が掲げられてゐる。例言によれば、「頂妙寺訓本の初摺で最も鮮明なものを選んで影写したもの」である。この頂妙寺版は初版ではなく、明治版の影印であることは実際にその訓点を調べてみて知られることである。ついでながら、この両氏には『法華經索引』(昭和十六 平楽寺書店)の著のあることを付け加へておく。昭和三十六年には、大石寺版の『真訓両読

妙法蓮華經並開結』が細井日達師の編、発行所は創価学会で出てゐる。内容は殆ど同じであるが、やはり、頂妙寺版については何も触れるところはない。まことに不思議であるが、これがその世界の常識なのであらうか。このほか、本稿とは直接関係はないが、『真読妙法蓮華經並開結』も大正十三年に出されてゐる。このほか、法華經普及会関係の訓読本等は、折本仕立てのものも、何回となく出されてゐる。一々はとらへきれないし、内容的に同じであるので、これ以上は触れない。

頂妙寺版の訓点は、法華經普及会の関係の書物だけでなく、他の諸種の法華經訓読にも影響を与へてゐる。ただ、すでにいくつかの所で述べたことであるが、頂妙寺版の訓点によつた訓読であることが断はつてゐるものがないのが不思議である。しかも、訳者として堂々と別の個人の名前を掲げてゐるのである。以下の諸書でもさういふことがある。

④ 国訳大蔵經第一卷(大正八 国民文庫刊行会)には、清水梁山氏が訳者として随分詳しい開題を書いてをり、宗淵の『法華經考異』を、文辞語句の同異を知るために参照したことは述べてゐるが、なほ、国訳のもととなつた本文には触れてゐない。この訳文の原文は頂妙寺版明治版ではない。初版を参照したか、文段經をもとにしたかである。そのあたりは、精査しなければならない。国訳一切經は昭和三年十二月に訳者馬田行啓氏の開題を付けて刊行されてゐる。国訳の原本として大正蔵經によるのを原則とするが、法華經にはい

はゆる流布本があるから、主としてそれによるとしてゐる。この流布本こそが頂妙寺版である。訳文を見れば、その明治版によつてゐることは明瞭である。昭和新纂国訳大蔵経は昭和四年の刊行。これには訳者名がない。頂妙寺版によることは明白であるが、明治版にはよつてゐない。昭和八年初頭に文化協会といふところから『国語法華三部経 全』といふ美しい本が出た。この凡例には頂妙寺版によつて延書し、仮名は日相本によるとしてゐる。ただし、文意を明らかにするため、往々改めたところもあるといふ。訳文を見れば、明治版をもとにしてゐることが分かる。昭和五年、小林一郎氏の『国訳新註妙法蓮華経』が単行されてゐる。国訳文について、「従来世間に流布して居る数種のと大差なきものであるが、読み易く解し易いやうにと多少は意を用ゐたつもりである」としてゐる。頂妙寺版が初版・明治版とも参考されてゐるが、さらに変更も加へられてゐる。昭和九年に、大蔵経講座の中に『法華経講義』(上下)が出てゐる。境野黄洋氏の講義である。このなかに、和訳の項がある。この底本は示されてゐないが、その和訳を見れば、種々の本を参考してゐることが知られるが、頂妙寺版も大いに利用されてゐるやうである。

かういふ講義類に触れたら逃せないものとして、織田得能氏の『法華経講義』がある。上述より遙か以前、明治三十二年に発行されてゐる。但し、この訓読は、従来の訓法には全くとらはれぬものであり、以前にもかういふものが無かつたわけではないし、この後

にも散発的にはあるが、頂妙寺版の後のものとしては珍しいものである。法華経訓読史上これも一つの現象である。

⑤ その他、寓目した法華経訓読について、思ひ出すままに記す。

伊藤清徹氏編『和訳註解妙法蓮華経』、小型本726ページ、良書刊行会発行、発売は昭文堂(大正五年初版 大正八年六版)、この大正九年八版は、発行所が帝国教育会、発売が良書刊行会になつてをり、著作者も「仏教研究会」となり、個人名はなくなつてゐる。内容は全く同じである。参考のために記しておく。なほ、使用してある用紙も八年版は粗末な紙で、酸化しかけてゐるが、九年版は薄手のよい紙質のものであり、見た目に八年版は九年版の倍ほどの嵩がある。訓読文は頂妙寺版初版と明治版との折衷である。大正十一年には、河原智皎氏訳註『和訳註解法華経』(法響社)がある。凡例に、よつた原本についての言及はないが、訓読文を見れば、頂妙寺版初版の影響の強いものである。昭和六年、東方書院から出た仏教文庫1『妙法蓮華経』(内題は「法華経」)は頂妙寺版初版の訓み下しである。昭和九年六月、宮沢清六氏は、兄宮沢賢治の意志として『国訳妙法蓮華経』を発行した。これには賢治の「合掌 私的一生涯の仕事は此経をあなたの御手許に届けそして其中にある仏意に触れてあなたが無上道に入られん事を御願ひするの外ありません昭和八年九月二十一日 臨終の日に於て 宮沢賢治」の識語をもつ。訓読は頂妙寺版初版または文段経によるものである。昭和二十四年明和堂編輯部を編者とする訓読本『法華経並開結』(内題は「妙法

蓮華經」がある。法華經普及会のことは何も記されてゐないが、頂妙寺版明治版の訓み下しである。岩波文庫として、昭和三十七年、坂本幸男・岩本裕両氏の名で、上中下三冊で出版された。偶数ページに漢文の本文とその訓み下しを掲げ、奇数ページに「正しい教えの白蓮」(サンスクリット原典からの口語訳)が掲げられてゐる。漢文の原文は春日版法華經により、訓み下しは必ずしも従来の慣例に従わず、その意味によつて訳したとする。初版と改版とは相当の違いがある。その訓みは、だいたい前記で想像が付くやうに、かなりいろいろの訓読が混じり合つたものである。伝統的よみと、学校漢文的訓みの入り交じつたものである。昭和六十年手塚政子氏『新訓妙法蓮華經並開結』(青金社)がある。頂妙寺版初版がそのもとなつてゐる訓読文である。昭和六十三年には、奥村寂照氏が頂妙寺版の訓点に基づき訓読してゐる(『訓読妙法蓮華經並開結 妙法堂版』)。このことは、「発刊に際して」に述べられてゐる。それを見れば明治版をもとにしてゐることが知られる。

上宮教会編鴻盟社発行の『法華經』(明治三十八年)は漢文に訓点の付けられたものであるが、多くは頂妙寺版によつて詳しく訓点を付けてゐる。これは菊判213ページの本である。漢文に訓点を付したものは、他に山沢見道氏の編輯発行にかかる『縮刷法華經』がある(昭和三年 事業興信日報社)。仮名は無いが返り点のみを施したもので、文庫版より一回り小型B7判250ページの極く小型の本である。この訓点も、頂妙寺版が基本になつてゐることは、

少し調べれば判明する。

以上、多く頂妙寺版の影響下にある訓読本、訓点本を紹介した。頂妙寺版自体も、明治十九年の木版本を初めとし、明治三十七年には活版化され、小型袖珍本が出てゐる。現在、銅版を元とし大小の判が出版され続けてゐる。昭和新版はまだ普及してゐない。

⑥ 頂妙寺版の訓点と関係のないものも先に二三は上げたが、もう一つ挙げておく。ただし、全く頂妙寺版と関係のないものを捜すのは大変難しいのである。非思量道人訳『標註和訳大乘法華經』(非思量窟出版部 明治三十八年)である。全く従来の訓読とは没交渉であるが、これはこれで首尾一貫したものとなつてゐる。

## 十一 その他

本来、平安古点の諸本について最初に記すべきであつたであらうが、門前氏の解題がある(注10)。さらに、諸文庫に蔵する訓点本も多くはないが存する(もちろん、法華經そのものは多数存在する。ただ、装飾経や本文だけのものが多数を占める)。それらについても記すべきであるが、すでに、相当の紙数を費やしたので、すべて他日を期することとする。今回は、法華經全体について述べたのであるが、その一部を取りだしたり、ある特定の「品」の又特定の部分のみを取り出して一部の書とすることがある。「法華經要品」と称するものである。「観音經」といはれるものや、「寿命品」などは単独で行はれることもある。かういふものについては、すべて割愛

した。訓読法華経も、経本として八冊本、二冊本など種々の形で出版され続けてゐる。これらについても刊行年が違ふだけのものは一々挙げない。また、訓点の無いもの、仮名本でも音読の仮名本があるが(音読をすべて平仮名で記した版本もある)、それについてもすべて省略した。現代語訳したものや、講話類も取り扱はなかつた。いづれについても、訓読史を考へる上から、放置すべきことがらではない。法華経のごとき多くの資料のある対象に一人で立ち向かうのはドン・キホーテである。すべて、他日を期し、諸賢の教示を冀ふものである。

注1 その一から八までで扱つた内容を、為字訓別に記せば、一、由・求・当 二、得・被 三、定 四、作・成 五、是・名 六、以 七、与 八、助・向である。

注2 それぞれの所収をその為字のNo及び品名で示す。一、No 1～98、序品～譬喩品 二、No 99～168、譬喩品～信解品 三、No 169～252、葉草品～化城喩品 四、No 253～362、五百弟子品～見宝塔品 五、No 363～447、提婆品～涌出品 六、No 448～502、寿量品～法師功德品 七、No 503～567、不輕品～妙音品 八、No 568～618、普門品～勸発品

注3 『佐藤茂教授退官記念論集国語学』(昭和五十五) 所収

注4 『印度学仏教学研究』28-1(昭和五十四) 所収

注5 為の文字に対する漢字の注を「為字訓」と称する事とする。特に断わらない限りは、為為章等の漢字訓をいう。その為字に対する和訓「為字和訓」と区別しておく。

注6 日遠(一五七二-一六四二)上人撰。本満寺刊の複製がある。なほ、この複製と立正大学図書館蔵の「龍華日董」所持の版本とを比べてみると振り仮名にいくつか差がみられる。立正大学本は、開経の表

紙裏に「龍華日董之」とあり、巻八巻末に「是純日董」とあり、結経表紙裏にも「日董之」とある。そして、結経巻末に、細字で「夫為直談経旨於諸文取有便章句以書加之文段之下又集諸点本從其善者若有所不安頗為改易之歟希後賢改削耳 慶長十七龍集壬子孟夏首 沙門日遠」と手書きの識語がある。文面は、撰者の文言として不自然ではない。

日遠の筆跡を知らないで、断言できないが、これを信じれば、日遠自身の手沢本の可能性も有る本である。それだけに、複製本との違ひに付いては、看過出来ないものがある。なほ、複製本では、この識語が巻一の巻末に印刷されてある。いづれ精査の必要がある。立正大学本のそれは、あるいは、後人の加筆かもしれない。それはともかくとして、訓点の内容には明らかに相違がある。ただ、前後の決め手は現在つかんでゐない。

注7 「防府天満宮藏妙法蓮華経八巻の訓点」(『内海文化研究紀要』12一九八四)

注8 佼成図書館蔵寶産圖書『訓読妙法蓮華経』(二・三・五・六・七・八)(番号 31401)

注9 高度化推進特別経費・大学院重点特別経費による研究科共同研究『開発における文化 2』(開発・文化叢書5)一九九四所収

注10 この大体については、「法華経為字和訓考」(以下「和訓考」といふ)(二)の「二一 資料」に述べた。門前正彦「立本寺藏妙法蓮華経古点」(『訓点語と訓点資料』別巻四 昭和四十三)に釈文がある。

注11 大坪併治「訓点資料の研究」(昭和四十三)に、龍光院藏妙法蓮華経古点の写真と釈文が掲載されてゐる。

注12 全巻音読用総仮名付き、声点・為字訓がある。複製本がある。『日相本妙法蓮華経並開結』(本満寺 昭和四十八)

注13 元徐行善の科注。必昇の序文によれば、宋柯山守倫の科注印本の湮没したのを嘆き徐行善居士が科注したもの。版本多数あり。「徐注」といふ。

注14 明一如の科注七巻に冠注を施したもの。十二巻。元禄3年の版本



がある。これは、八巻本によつてゐる。

注15 五山版科注は徐行善の科注である。佼成図書館蔵本によれば、訓点は付刻されてゐないが、為字訓はある。佼成図書館本には精細な書き入れ訓点がある。

注16 日遠撰。文段經法華經には日遠による訓点が付けられて出版されてゐる。この訓点は、日遠が諸書を博搜して得た成果であるが、その経過及びその後の所見を記したものである。完成は、文段經の出版、慶長十七年一六一二に遅れること十年、元和七年一六二二、出版は、寛永十九年一六四二版と寛文九年一六六九版がある。

注17 拙稿「頂妙寺版法華經の成立」(『日本・中国における近世の社会と文化』平成一 所収)

注18 拙稿「頂妙寺版法華經の改訓——法華經為字和訓考の一環として——」(『奥村三雄教授退官記念国語学論集』平成一 所収)

注19 前延暦寺大僧正赤松光映の名を冠する『訓点校正妙法蓮華經』(明治二十四 京都山田保延堂)を見てみれば、その訓読に対する全体の姿勢は解る。内容の詳細については本書について実見して頂きたい。少しだけその実態を述べれば、本書の訓点は、法華經訓読の歴史に關しては全く無頓着、ほぼ学校漢文式(江戸時代四書五經等の寺子屋における漢文素読の仕方をまとめたやうな漢文訓読法を仮にかう称しておく)読み下し、しかも読みにくい所は白文のまま残してしまつてゐる。

注20 慈海宋順(元禄九年一六九六) 東叡山護国院第二世、大僧正。多くの經典を日本語の發音に適するやうに整理して上梓したので、後世これを慈海版といつて、大いに用ゐられた。法華經慈海版は、元禄五年一六九二に開版され、おびただしい版がある。従来、天台宗内ではその正しい読み方であるとされる山家読みが、師から弟子、先輩から後輩へと口伝相承されてゐたため、各山各所で異伝が生じてゐた。經文には四声点はつけられてゐたが、「仮名付け」は禁じられてゐたためその差が助長されてゐた。それに対し、慈海版では、難しい字には仮名

を付け、読み癖に従つて仮名付けされてゐたので、經典に新機軸を開き、山家版は姿を消し、山家読み自体忘れ去られるやうになつたといふ。それを嘆いたのが、宗淵である。

注21 宗淵(天明六一七八—安政六一八五九)、安濃津西來寺の学僧。正確な經書を遺すべく努めた。慈覺大師相伝の読み方の復活のため、法華經諸本を全国を遍歴して求め、『法華經考異』には七十七本が集められ対校されてゐる。法華經山家本・法華經山家本裏書を出版してゐる。

注22 木村晟・近藤良一・萩原義雄共編『西來寺藏仮名書き法華經—影印編—』(平成五 萩原義雄編『西來寺藏仮名書き法華經—翻字編—』(平成六))

注23 中田祝夫「重要文化財法華經方便品解題」(昭和五十六年五月二十四日訓点語学会における同氏の研究発表「日本大学蔵本「法華經方便品」白点(重要文化財平安初期)研究」の資料として配布された冊子)

注24 大坪氏のものと、築島・小林両氏のものは「訓点語と訓点資料」七輯(昭和三十二)所収。中田氏のものは、注23のなかにある。

注25 注9の拙稿の「1. 法華經和訳の種々」に述べた。

注26 天文十七年十一月、本法寺住侶日学が「宗慶靈位」のために寄進した本は、春日版に詳細な訓点を全巻に渡つて施してある。本書は「江州北之郡八幡宮常住」と各巻頭にあり、続いて「沙門 日学」「山門東塔南谷 淨教房 真如藏 黄」とある。又、上欄には「八幡宮淨教坊(房)ではない」と記されてゐる。この八幡宮と淨教坊(坊)との關係は未調査であるが、別々ではない書きぶりである。ただ、八幡宮の淨教坊とすれば奇妙な感じである。本書の訓点は、ほぼ倭点法華經のそれに従つてゐるが、まゝ、加点者(といふよりは、「訓点記入者」といふのが、実状にはあつてゐる)の意志による変更もある(本書は、昭和二十九年八月十日叡山文庫に寄託されたもので、比叡山真如藏書、部数五、書冊番号三三三ないし四〇〇のラベルがある)。叡山文庫での御教示によれば、八幡宮は所在不明、日学は日蓮宗の僧であるとのことである。

また、文化二年の写本で全巻に訓点のある本もある(大正十年十一月五日収蔵、普潤藏書、部数一六九、書冊四一六ないし四二三)。

架蔵三井寺円満院尊能所持本写本八巻にも詳細な訓点があり、日学本同様倭点法華經を基本としてゐる。

注27 現在、日用に供せられてゐる法華經の經本のうち、訓点が付されてゐるものとしては、頂妙寺版の明治版をもととするものが大半である。折本八冊のものに大・中・小とあり、もと銅版印刷されたものを原版にして印刷されてゐる。洋本仕立てのものは、多くは訓読文化されてをり、訓点付のものは少ない。そして、その訓読は、頂妙寺版明治版をもととするものがほとんどである。それにもかかはらず一つの不思議がある。前にも述べたことがあり(注18)、直接このことを頂妙寺当局にも伺つたが、いまだに要領を得ないので、再び記して、識者の御教示を得たい。すなはち、このやうな頂妙寺版盛行の現状であるのに、日蓮聖人第七百遠忌記念の『日蓮宗事典』(昭和五十六 A4判1375頁)に、頂妙寺版法華經のことが一言半句も記されてゐない。この作成に携はつた「日瞻」についても「(1800・67)上妙院と号す。說法一万三〇〇座といわれる布教者。」と僅か二行の記事があるのみで、頂妙寺版法華經については依然触れない。周知のこととしてゐるのであらうか。法華經について全く記述が無いわけでもないの、このことが不審に思はれるのである。

注28 為字和訓考の中でその事については述べてある。例へば、和訓考(二)。

注29 禿氏祐祥「法華經の訓読について」(『龍谷史壇』32 一九四九)

兜木正亨『法華版經の研究』(昭和二十九)

注30 久保木彰一「仮名法華經切について」(『古筆と写經』平成一)に伝寂蓮筆として紹介されてをり、卷三が完存するとされる。ただし、八代仁兵衛氏蔵とする。他の仮名法華經切も紹介されてゐる。『続日本絵巻大成10』の松原茂氏の解説にも同様のことが記されてゐる。

注31 野沢勝夫「法華訳和尋跡抄所引の仮名書き法華經について」(『昭

和学院短期大学紀要』17 昭和五十六)

林義雄「法華訳和尋跡抄所引法華經古訓と足利本仮名書き法華經について」(上)(『松学舎大学東洋学研究所集刊』10 昭和五十)

注32 中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華經』研究篇(平成五)所収

注33 注9参照

注34 拙稿「為字和訓よりみたる法華經訓読」(『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』昭和五十九)

補注 最近、改めて佼成図書館にて関係する法華經諸本を閲覧する機会があつたが、本稿に洩れてゐるものが相当数あつた。別の機に報告する。